

論文要保護児童対策地域協議会の支援者の対話活動に基づく家族支援の在り方に関する研究
— 支援者が捉える課題と創造的な対話活動の展開についての一考察 —

梶 原 浩 介

要 旨

本研究は、要保護児童対策地域協議会（以下「要対協」と記載）の支援者27人を対象に質問紙調査を実施した。主な目的は（１）支援者が捉える家族支援の課題整理、（２）支援者同士の創造的な対話活動を構成する語りの要素について明らかにすることである。分析方法は、テキストマイニングによって整理し、質的内容分析における理論的コード化を用いた。その結果、23人の回答を得た（回収率85.2%）。支援者が捉える家族支援の課題は、「対話を創る場」「多角的な情報の統合」等を捉えた。創造的な対話活動を構成する語りの要素は、【共有】【明確化】【探求】【統合】【創造】【具体化】を捉えた。

本研究を通して、要対協の対話活動は【創造】の過程が《要対協の機能及び役割》の〈役割分担〉する上で重要になることがみえてきた。したがって、家族支援の探究及び発見には、支援者間による創造的な対話活動が求められる。

Keyword：要保護児童対策地域協議会、支援者、家族支援、語り、創造的な対話活動

はじめに

筆者は現場でのソーシャルワーク実践を通して、不登校状態にある子どもたちと関わってきた。不登校に至った状況を振り返ると、学習や友達関係等の学校生活上の課題のみならず、睡眠・食事・身の周りの整え等の基本的生

活習慣の乱れといった家庭生活上の課題が現場での関わりからみえてきた。一方、親自身もまた心身の健康面の不調、経済的な困窮、仕事の悩み等の多様かつ複合的な生活課題を抱えており、子どもの養育において不適切な関わりに至っていることが現場での関わりからみえてきた。これらの関わりを通して、不登校¹の生活課題を抱える子どもたちへの支援に取り組むためには、親との信頼関係を築きながら、子どもとの関わり方を親と共に考えていくことが求められる。そのため家族支援が当事者支援において非常に重要なアプローチになると考える。しかし、先述したように家庭環境には多様かつ複合的な生活課題があるために、地域の支援者による協働の実践が求められる。

筆者は協働的实践を検討する1つの視点として、要保護児童対策地域協議会（以下、「要対協」と記載）という地域の支援者同士の対話活動に着目した。この他職種との対話活動では、異なった職業文化、異なる環境で活躍する支援者との対話から家族1人ひとりに対する各立場での見立てや援助等を対話活動の中で語りを織り交ぜたり、時には批判したりと複雑な語りの過程を経ながらも対象となる家族の支援の在り方について議論が成される。生活課題を抱える家族に対する支援の取り組みが見出される背景には、地域の支援者がもつ知識や援助技術を、家族1人ひとりの実情に応じた援助技術へと、その家庭ならではの援助の方法論として地域の支援者が語り合いの中で見出している。昨今、唱えられている地域共生社会の実現の推進には、医療・教育・福祉・行政の専門性をもった地域の支援者や民間企業や地域住民等との包括的・協働的な実践が今後より一層求められる。児童福祉においては、包括的・協働的实践を実現する場として、要対協がある。梶原（2018）の調査では、要対協の場は、地域の支援者同士のケース検討の場として「公正・中立の場」「新たな援助技術の創造の場」「対話を創る場」として捉えている。学校・病院・行政機関でのケースカンファレンスは職場内の支援者同士との検討会議が中心となるが、要対協の場では家庭に関わる地域の支援者等が一堂に会した検討会議となる。したがって、各専門領域で構成される地域の支援者が取り組む対話活動を通して、生活課題を抱える子どもや家族1人ひとりが安心

して過ごせる地域生活の検討に繋がるのである。

本研究では、地域の支援者間による対話活動において、支援者間が語り合う対話のプロセスの中で、どの部分に着目すれば家族支援における新たな知恵や援助技術が見出されるのかを探求したい。

I. 背景と目的

(1) 問題の所在

1) 不登校の社会的問題の現状

文部科学省の調査(2016a)を整理すると、不登校児童生徒数は、2000(平成12)年に134,286人、2009(平成21)年では122,432人と若干の漸減をみせるが、2013(平成25)年、2014(平成26)年と再び増加し、2019(令和元)年には164,528人(文部科学省 2019)に至る。不登校の背景要因(文部科学省 2016b: 4)を整理すると「本人・家庭・学校に関わるさまざまな要因(学習、いじめ、児童虐待、貧困等)が複雑に絡み合う場合が多い」「社会における『学びの場』としての学校の相対的な位置づけの低下」「学校に対する保護者・児童生徒自身の意識の変化」「病気や経済的理由による長期欠席にも『不登校』が潜在化している可能性」があるとして、不登校の問題を教育の観点のみで捉えて対応することの限界を指摘している。そのため学校のみならず地域の医療・福祉・行政等の専門性をもった支援者による家族支援が求められる。

2) 養育環境が与える子どもへの影響

厚生労働省の調査(2019)を整理すると、2018(平成30)年度中に、全国212ヶ所の児童相談所が児童虐待相談として対応した件数は159,850件であった。児童虐待の構成(厚生労働省 2016)をみると、虐待の種類は、心理的虐待が43.6%で最も多く、次に身体的虐待が29.4%である。虐待者は、実母が52.4%と最も多く、次に実父が34.5%である。実母の子どもに対する虐待や不適切な養育が窺える。児童虐待を含めた「子どもに対する不当な

扱い、明らかに不適切な養育、事故防止の配慮の欠如、言葉の脅かし、性的行為の強要等によって明らかに危険が予測されたり、子どもが苦痛を受けたり、明らかな心身の問題が生じているような状態」(厚生労働省 2000) といった子どもに対する不適切な関わり方をマルトリートメントという。この段階での家族支援の介入は、児童虐待の予防的な支援・対策に繋がると重要視されている。また不登校の問題においても「若年母親(初産時)、若年母親(本人時)、母子世帯の子どもにおいて、『不登校経験あり(現在は登校)』と『現在不登校中』が高い。子どもの養育環境として、母親の若年・子育て経験・婚姻状況(環境因子)により、子どもの不登校経験率が高くなっている」(労働政策・研修機構 2015: 54) ことから、親自身の子育て経験や婚姻状況等の養育環境、親自身の子どもへの関わりといった環境因子によって子どもの不登校経験率が異なる。したがって、ハイリスク家族²に対する支援として、地域の支援者等で構成される要対協組織には、早期発見・早期支援の社会的役割が期待されている。

3) 要対協組織がもつ対話活動の意義と課題

要対協は、児童福祉法のもと地域で子どもの安全を守り、子どもが親と共に安心して住み続けるための関係機関連携による支援システム構築を目指すものである。このシステムは、個別ケース検討会議が中心となり、実務者会議、代表者会議から構成される。児童虐待通告を受けた9割の子どもたちを在宅支援するために活用されている。つまり、要対協はハイリスク家族を地域で支えるうえで重要な役割を担っている。具体的には「情報の共有化」「早期発見・早期支援」「関係機関の連携」「担当者の意識変化」「役割分担」「関係機関の協働」が期待されるが、協働的实践に至る対話活動において、支援者の職種・経験・専門性等の差違により家族支援における協働的实践に課題を感じている現場の支援者は少なくない。つまり、地域の支援者同士の対話活動、ケースカンファレンス³を通して、家族支援に関する協議について「各専門領域の専門的な知識や技術についての話を、家族の実情に合った家庭内

で出来る生活の取り組み方や助言へと普遍的な知識や技術についての表現へと変換することが子ども家庭支援に求められる重要な視点」(梶原 2016)であることを指摘している。一方で、長沼(2015:24-25)は、他専門職同士の対話活動の際に生じる課題として、次のように説明している。支援者自身の知識や経験の差異は、「より多く知っている・語れる者」を優位に、「あまり知らない・語らない者」を劣位に感じさせてしまうと述べている。その背景に、対話活動を通して地域の支援者の間で無意識のうちにパワーバランスが構築されてしまい家族支援に必要な対話が阻害させてしまう要因となり得る。そのため地域の支援者との協働関係を築き上げる上で、創造的な対話活動として、ダイアログの視点が求められると考える。丸野(2014:175)によれば、「ダイアログは、『ものの見方・考え方・価値観』の異なる人々が、創造的・批判的なコラボレーションを繰り返しながら、新たな知を生成し、適切な解決策を探究・発見していく“協創による協働構成の過程”である」と述べている。この創造的な知の営み(丸野 2014:177)には、互いの立場や違いを認め合った上で、1人ひとりを大切にする「話す」・「聴く」の対話活動の過程を通して、支援者に次のような技能や態度が備わっていることが求められる。1 他者の考えを最後まで聴く、2 自他の違いを明確にする、3 論理を組み立てながら、筋の通った考えを作り、表現する、4 自他の考えを批判的に聴き、新しい考えを生み出す、5 自己の視点からのみの意見表明ではなく、他者の視点を取り入れ、それを潜り抜けた視点から、再度、自分のアイデアや意見を吟味検討し表現する、という5つの技能や態度である。まさに、要対協の場では、多様かつ複合的な生活課題を抱える家族に対応できるよう福祉・医療・教育・行政等の地域の支援者との協働的な支援が求められる。しかしながら、加藤(2014・2016)の調査によれば、医療、保健、福祉の情報共有・協議の程度には自治体間により差があることを指摘しており、要対協内の対話活動には課題があることが伺える。本研究では、要対協の場に集う地域の支援者間の対話活動に着目することで、要対協内の対話活動上の課題や家族支援についての検討が如何になされるかについて整理する

ことを目指す。

（２）研究の目的

（１）の先行研究を踏まえて、本研究では次の２点を目的に質問紙調査を行った。１）要対協支援者が抱える家族支援の課題について整理すること、２）家族支援に取り組む上での対話活動の構成過程を捉えることについて明らかにすることである。

Ⅱ．調査研究の方法

（１）調査対象と方法

本調査の調査対象者は、A地域の要対協の支援者27人を対象とした。調査方法は質問紙調査をおこなった。

（２）調査実施日と回収方法

１）調査実施日：平成X年11月21日

２）回収方法：要対協実務者会議にて質問紙調査を実施。会議終了後、質問紙を参加者の自由意思により提出の協力を依頼し、質問紙の回収を図った。なお質問紙は「所属機関」「職種」のみを記入する形とし本人と特定できないよう配慮している。

（３）定義づけと回答形式

質問項目は、ハイリスク家族と対峙した際に、支援者自身が発揮できる役割・支援内容等の支援者としての強みを「専門性」、担当する支援者自身が家族支援に取り組む上での支援者としての役割・支援方法、職場の規則等により支援者自身が感じる支援に取り組む上での難しさを「限界性」と位置づけた。回答形式は１）「所属機関・職種の立場から考える支援の目標」、２）「所属機関・職種の専門性からできる、家族支援の取り組み」、３）「所属機関・職種の限界性から、どの専門機関と、どのような連携・協働するか」と自由

回答形式にて質問紙調査を実施した。なお記入の際には、個人の性格や個性から生じる得意・不得意に関する記入を出来る限り避け、支援者としての専門性・限界性についての記入を促すために留意事項としてその旨を一文に記した。

（４）SPSS Text Analytics for Surveysによるテキストマイニング

研究協力者より回収した質問紙で捉えたデータを基にIBM製品のSPSS Text Analytics for Surveys（以下、「TAS」と記載）によるテキストマイニングによって分析した。論文表記する際には、支援者1人ひとりの象徴的な語り⁴に着目し、文字化・図式化することで一般化した。

- 1) 逐語化した質問紙の自由記述回答の内容を意味の分かる範囲内に文節ごとに区切って分類し、テキストデータとして変換した。
- 2) テキストデータに、「No」「所属機関」「職種」「語りの内容（『専門性からできる家族支援の取り組み』『対話活動を展開する上での工夫・課題』等）」をつけることで、支援者1人ひとりの語りを項目ごとに分類した。語りを分類する際には、TASを用いて、支援者の語りを構成する肯定的/否定的な単語を整理した。そして、整理した単語を基に一文ごとにカテゴリ抽出を図ることによって専門性とその限界を分類した。その結果をもとに支援者1人ひとりが捉えるハイリスク家族に対する支援の取り組みの上での支援者の対話活動についてまとめた。

（５）質的内容分析における理論的コード化

1) 手続き過程

調査で得た内容は、個人を特定しやすい、機密性の高いデータとなる。そのため、理論的コード化⁵の手続きとして、オープン・コード化⁶、軸足コード化⁷、選択的コード化⁸へと語りというデータの抽象度を高めた。コード化のプロセスとして、先ず各当事者からみえる家族が抱える生活課題に関する象徴的な語りに焦点をあてテキストデータを意味の分かる範囲に文節ごと

に分類し、コーディング（概念化）を図る（オープン・コード化）。次に一般化した概念を、他の概念との関連性を比較検討することで各当事者の現状と課題などを整理する（軸足コード化）。そして軸足コード化を繰り返すことによってハイリスク家族と関わる上で支援者同士の中で対話活動を展開する上での課題や工夫の仕方について探ると共に、促進者としてのソーシャルワーカーがどのような対話のポイントに着目することで、家族支援における新たな知恵や援助技術が見出されるのかを、要対協支援者の対話活動を基に考察を深めた。

2) 本分析方法の限界性と有効性

本分析方法を使用する上での限界性は、「コード化や比較の可能性が際限なく存在する」（Uwe Flick 2009:230）ことである。支援者1人ひとりの語りを記録として蓄積することにより、そのデータから何に着目し分類するか、コード化やサンプリングを終了する基準もない。そのため本研究では各当事者の語りを含んだ記録をTASにより分類し、事前にコード化した。その上で、本分析方法を展開した。

本分析方法を使用する上での有効性は、「いかによりよい支援を実現するか」という実践的課題に応える点である。現場での実践者が、普段から何となく感じているが明確に言葉にできない「勘」や「予測」といったものを、調査データとして記述（言語化）し、他のケースと比較しながら分析を繰り返すことによって、その現象に共通して現れる特徴を明らかにし、現場に役立てることを目指す。その上で本分析方法は本研究の目的を達成することに意義をもつと考える。

（6）倫理的配慮

本調査実施前に、要対協において、次のような説明を行った。1）得られたデータは教育・研究以外の目的に使用しないこと、2）回答者個人が特定されるような形での公表をしないこと、3）本調査に必要としない情報は収

集しないこと、4) 不適切な表現などないかチェックを行い、必要となる記載に関しては、本文または注にその旨を明記すること、5) 収集した情報は厳重に管理し、第三者に触れないようにすること、6) データ分析に使用するパソコンなどの記録媒体には、パスワードを設定し、外部への接続しないパソコンを使用し、情報の漏洩、流出を防止すること、7) 協力は任意であることを口頭及び書面にて説明する。なお調査実施に関する同意は、要対協の会議終了後、同意書及び質問紙を提出していただいた方を調査協力者とみなした。

Ⅲ. 結果 要対協支援者が捉える家族支援の専門性とその限界

(1) 調査協力者の概要

A地域の要対協の支援者27人を対象にアンケート調査の協力を依頼した結果、23人の回答を得た（回収率85.2%）。回答者の内訳は、教育関係者6名（小中学校の養護教諭、幼稚園、保育園、学童保育所）、福祉関係者8名（児童相談所、社会福祉協議会、福祉事務所）、行政関係者9名（教育委員会、子育て支援センター、子育て支援課、福祉課）であった。なお個人情報に関しては十分配慮しデータ処理をした。

(2) 家族支援における限界を踏まえた支援者の対話活動

(2) で捉えたデータを基にTASによるテキストマイニングによって「キーワード」を抽出した。抽出された「キーワード」を軸に、背景となる内容を『インシデント』として記入する。その内容に〈カテゴリ〉《中核カテゴリ》を付記し、支援者の所属機関を《中核カテゴリ》、全体の内容を指すものを【ステージ】とコーディングした。そして、『インシデント』事項に該当する〈カテゴリ〉《中核カテゴリ》を明確にするためNoを付記した。なお本文表記の際には、ステージを【 】, 中核カテゴリを《 》, カテゴリを〈 〉, インシデントを『 』, キーワードを「 」の記号に分け明記した。

1) 要対協における家族支援の課題

1 対話を創る場

支援者の対話活動を通して、【対話を創る場】の《要対協の機能及び役割》の重要性が改めてみえてきた。〈早期発見・支援〉の『「要保護児童対策地域協議会」に集う「地域」の「支援者」からの「情報」を基に、「子ども」や「保護者」の「実態」について「共有」する』、〈情報の共有化〉の『「要保護児童対策地域協議会」に「参加」することで、「子ども」や「家族」の「生活状況」の「把握」、「支援者」の支援の「取り組み状況」、「課題」「成果」「考え」等を「共有」する』、〈役割分担〉の『「要保護児童対策地域協議会」に「参加」することで、「子ども」や「家族」の「生活状況」の「把握」、「支援者」の支援の「取り組み状況」、「課題」「成果」「考え」等を「共有」する』、〈関係機関の協働〉の『「家庭」と近い「学校」や「民生委員」、「市町村」からの「生活に役立つ情報」を「家庭」について「伝える』』、〈担当者の意識変化〉の『「家族」の「出来ている部分」、「努力している部分」等の「肯定的な「変化」に「目」を「向ける』』が整理された。

2 多角的な情報の統合

支援者の対話活動を通して、【多角的な情報の統合】の《多様かつ複合的な生活課題》に対する対応として多角的な情報の統合の必要性がみえてきた。〈教育の課題〉の『「欠席」が多く、「学習」の「遅れ」や「集団生活」に「なじめない』』、〈健康の課題〉の『「身体的」や「精神的」な「健康」の「不調』』、〈就労の課題〉の『「保護者」の「仕事」が「続かない』』、〈子育ての課題〉の『「保護者」自身も自分の親から「情緒的」に受け止められた「体験」がない』、〈経済的な課題〉の『「経済的」な「悩み」に対して、「生活保護担当ケースワーカー」によるサポートに取り組む』が整理された。

3 当事者との接点の探索

支援者の対話活動を通して、【当事者との接点の探索】における子どもや

家族との《接点》についての課題がみえてきた。〈子どもとの接点〉の『「地域」で「子ども」と繋がりのある「支援者」との「連携」を図る』、〈家族との接点〉の『「地域」で「保護者」と繋がりのある「支援者」との「連携」を図る』が整理された。

4 家族支援に対する関わり方（援助技術）

支援者の対話活動を通して、【家族に対する関わり方】として《家庭》へのアプローチの方法、《地域》へのアプローチの方法についての援助技術の課題がみえてきた。《家庭》へのアプローチの方法では、〈アウトリーチ〉の『「地域」との「関係者」と「繋がり」、「地域ぐるみ」で「家庭訪問」や「見守り」、「母親支援」をしていく』、〈ジョイニング〉の『「保護者」と「子ども」の「子育て」について「一緒に」に「話す」』である。《地域》へのアプローチの方法では、〈コーディネート〉の『「家庭」の「悩み」に合った「専門機関」へ「相談」』、〈ソーシャル・サポート・ネットワーク〉の『「家庭支援」については、「役所」、「福祉課」、「社会福祉協議会」等との「連携」を図り、「地域の支援体制」を整える』が整理された。

5 地域の社会資源

支援者の対話活動を通して、【地域の社会資源】として《フォーマルな社会資源》《インフォーマルな社会資源》の専門性や限界性の把握、地域の支援者との繋がり希薄さ、地域の社会資源の把握等の課題がみえてきた。《フォーマルな社会資源》では、〈福祉〉〈医療〉〈行政〉〈教育〉〈就労〉の『「子ども」を取り巻く「家庭状況」を「支える」ための「福祉課」との「連携」（「経済状況」などの確認）』である。《インフォーマルな社会資源》では、〈地域〉の『「悩み」を聞きながら、「家庭」が「孤立」しないように「地域」の「支援者」と「連携」する』が整理された。

表1. 「支援者が捉える家族支援の限界性からみえてきた課題」

ステージ	No	中核カテゴリ	No	カテゴリ	インシデント	抽出されたキーワード
対話を創る場	1	要対協の機能及び役割	1	早期発見・支援	1-1-1.「要保護児童対策地域協議会」に集う「地域」の「支援者」からの「情報」を基に「子ども」や「保護者」の「実態」について「共有」する。	「要保護児童対策地域協議会」「地域」「支援者」「情報」「子ども」「保護者」「実態」「共有」
			2	情報の共有化	1-2-1.「要保護児童対策地域協議会」に「参加」することで「子ども」や「家族」の「生活状況」の「把握」「支援者」の「支援の取り組み状況」「課題」「成果」「考え」等を「共有」する。	「要保護児童対策地域協議会」「参加」「子ども」「家族」「生活状況」「把握」「支援者」「取り組み状況」「課題」「成果」「考え」「共有」
			3	役割分担	1-3-1.「要保護児童対策地域協議会」に「参加」することで「地域」の「支援者間」で「家庭支援」に求められる「役割分担」を「一緒」にする。	「要保護児童対策地域協議会」「参加」「地域」「支援者間」「家庭支援」「役割分担」「一緒」
			4	関係機関の協働	1-4-1.「就学」に向けての「小学校」との「情報共有」「連携」。 1-4-2.「家庭」と近しい「学校」や「民生委員」「市町村」からの「生活に役立つ情報」を「家庭」について	「就学」「向けて」「小学校」「情報共有」「連携」「家庭」「学校」「民生委員」「市町村」「生活に役立つ情報」「伝える」
			5	担当者の意識変化	1-5-1.「家族」の「出ている部分」「努力している部分」等の「肯定的な「変化」に「目」を「向ける」。	「家族」「出ている部分」「努力している部分」「肯定的な「変化」に「目」を「向ける」
多角的な情報の統合	2	多様かつ複合的な生活課題	1	教育の課題	2-1-1.「欠席」が多く「学習」の「遅れ」や「集団生活」に「なじめない」。	「欠席」「学習」「遅れ」「集団生活」「なじめない」
			2	健康の課題	2-2-1.「身体的」や「精神的」な「健康」の「不調」。	「身体的」「精神的」「健康」「不調」
			3	就労の課題	2-3-1.「保護者」の「仕事」が「続かない」。	「保護者」「仕事」「続かない」
			4	子育ての課題	2-4-1.「母」の「子ども」に対する「関わり方」が「厳しい」。 2-4-2.「保護者」自身も自分の「親から「情緒的に受け止められた「体験」がない」。	「母」「保護者」「情緒的」「体験」
			5	経済的な課題	2-5-1.「経済的」な「悩み」に対して「生活保護担当ケースワーカー」によるサポートに取り組む。	「経済的」「悩み」「生活保護担当ケースワーカー」
当事者との接点の探索	3	接点	1	子どもとの接点	3-1-1.「子ども」からの「話」を「しっかりと」聞く。 3-1-2.「地域」で「子ども」と繋がりがある「支援者」との「連携」を図る。	「子ども」「話」「しっかりと」聞く「地域」「子ども」「支援者」「連携」
			2	家族との接点	3-2-1.「地域」で「保護者」と繋がりがある「支援者」との「連携」を図る。	「地域」「保護者」「支援者」「連携」
家族に対する関わり方	4	家庭	1	アウトリーチ	4-1-1.「地域」との「関係者」と「繋がり」「地域ぐるみ」で「家庭訪問」や「見守り」「母親支援」をしていく。	「地域」「関係者」「繋がり」「地域ぐるみ」「家庭訪問」「見守り」「母親支援」
			2	ジョインティング	4-2-1.「保護者」と「子ども」の「子育て」について「一緒」に「話す」。	「保護者」「子ども」「子育て」「一緒」「話す」
	5	地域	1	コーディネート	5-1-1.「家庭」の「悩み」に合った「専門機関」へ「相談」。 5-1-2.「家庭支援」に「あたって」は「民生委員」「社会福祉協議会」「児童相談所」へ「繋ぐ」。	「家庭」「悩み」「専門機関」「相談」「家庭支援」「あたって」「民生委員」「社会福祉協議会」「児童相談所」「繋ぐ」
			2	ソーシャル・サポート・ネットワーク	5-2-1.「家庭支援」については「役所」「福祉課」「社会福祉協議会」等との「連携」を図り「地域の支援体制」を整える。	「家庭支援」「役所」「福祉課」「社会福祉協議会」「連携」「地域の支援体制」
地域の社会資源	6	フォアム資源な社会	1	福祉	6-1-1.「子ども」を取り巻く「家庭状況」を支えるための「福祉課」との「連携」(「経済状況」などの確認)。	「子ども」「家庭状況」「支える」「福祉課」「連携」「経済状況」「医療機関」「生活保護課」「教育機関」「困る」「就労支援」「ハローワーク」「悩み」「家庭」「孤立」「地域」「支援者」「連携」
			2	医療	6-2-1.「医療機関」との「連携」を図る。	
			3	行政	6-3-1.「生活保護課」との「連携」を図る。	
			4	教育	6-4-1.「教育機関」との「連携」を図る。	
			5	就労	6-5-1.「ハローワーク」による「就労支援」。	
	7	社マフイン源会ルオン資な	1	地域	7-1-1.「悩み」を聞きながら「家庭」が「孤立」しないように「地域」の「支援者」と「連携」する。	

2) 創造的な対話活動を構成する語りの要素

要対協に参加する支援者1人ひとり、所属機関・職種の異なる人々が

集っている。それぞれの立場から捉えた家族支援の情報や支援者がもつ専門性から生じる知恵や援助技術が共有される。家族が抱える多様かつ複合的な生活課題によっては、1人の支援者では対応が困難な場合がある。家族支援に限界性を抱えた場合、他の専門性をもつ要対協支援者との協働的な実践が求められる。その際に、家族の実情に合った家族支援を展開するために、支援者同士による対話活動が展開される。その対話では、創造的・批判的なコラボレーションを繰り返しながら、新たな知恵や援助技術を生成し、適切な解決策を探究・発見していく対話活動へと進展していた。この対話活動の背景には、要対協支援者1人ひとりの立場や違いを認め合ったうえで、1人ひとりを大切にすると対話活動が展開されており、支援者同士の対話には【共有】【明確化】【探求】【統合】【創造】【具体化】といった創造的な対話活動を構成する一連の語りの要素が捉えられた。

先ず【共有】は、《他者の考えを最後まで聴く》と〈生活課題に対する支援の取り組み方の共有〉の『「保護者」が抱える生活課題に対する取り組みについて「学校」「地域」との「意見交換」や「連携」を図らなければならない「状況」（「発達障害」など）がある』、〈支援機関の体制についての共有〉の『「不登校」の「相談」は「SC」「SSW」等、〈考えの共有〉の『「個別ケース会議」に「参加すること」で「支援者」の「考え」を「共有」する』の対話活動を構成する語りの要素が捉えられた。【明確化】は、《自他の違いを明確にする》と〈専門性の把握〉の『「家庭」との関わりを通して、「地域」の「支援者」の取り組みを把握する』、〈限界性の把握〉の『「家庭」の「経済的課題」への「支援」に「課題を抱える」』の対話活動を構成する語りの要素が捉えられた。【探求】は、《論理を組み立てる》と〈専門性の類似点・相違点を探る〉の『「学校」が取り組んでいる「家庭支援」と「行政」が取り組んでいる「家庭支援」について「情報共有」する』、〈限界性の類似点・相違点を探る〉の『「支援者」が「困ったこと」、「悩んだこと」を「相談」を「受けたり」、「報告」をする』の対話活動を構成する語りの要素が捉えられた。【統合】は、《筋の通った考えを作る》《表現する》と〈専門性と限

界性を踏まえた対話」の『家族が抱える生活課題に対して、「支援者間」で出来ること、出来ないことを「一緒に」話し合う』、『支援者が抱える支援上の悩みを聞きながら、家庭が孤立しないように「地域」の支援者と連携する』の対話活動を構成する語りの要素が捉えられた。【創造】は、《批判的に聴く》《新しい考えを生み出す》と《新たなアイディアの創造》の『「学校」・「幼稚園」・「保育園」・「学童」・「子育て支援課」・「医療機関」・「生活保護課」・「警察」などと「繰り返し」「家庭の状況」を踏まえて「話し合う」』等の対話活動を構成する語りの要素が捉えられた。そして、【具体化】は、《自他の視点の融合させる》《支援を形にする》と《共に取り組む》の『家族と直接的に関わるできないため、家族と繋がりのある「地域」の支援者などを通じて、「家族との繋がり」の「結び目」をつくる』、『「子ども」に「直接的」に「会えない場合」は、「SSW」や「主任児童委員」などと「一緒に」「訪問」し、「声」を「拾い上げる」』の対話活動を構成する語りの要素が捉えられた。

これらの対話活動を基に、要対協支援者が捉える家族支援の限界性について、異なる専門性をもった支援機関との対話活動を展開することによって、支援者自身の所属機関単一の対話活動から、それぞれの専門性と限界性を織り交ぜられた創造的な対話活動へと対話の質が発展していることが調査を通して明らかになった。

表 2. 「協働の実践に求められる対話活動の構成要素」

ステージ	No	中核カテゴリ	No	カテゴリ	インシデント	抽出されたキーワード
共有	1	他者の まで考 聴え くを 最後	1	生活課題に対する支援の 取り組み方の共有	1-1-1.「保護者」が抱える生活課題に対する取り組みについて「学校」「地域」との「意見交換」や「連携」を図らなければならない「状況」「発達障害」などがある。	「保護者」「生活課題」「学校」「地域」「意見交換」「連携」「状況」「発達障害」
			2	支援機関の体制について の共有	1-2-1.「不登校」の「相談」は「SC」「SSW」。	「不登校」「相談」「SC」「SSW」「こころの健康」「精神科」
			3	考えの共有	1-2-2.「こころの健康」の「相談」は「精神科」。	「個別ケース会議」「参加すること」「支援者」「考え」「共有」
			4	専門性の把握	2-4-1.「家庭」との関わりを通して、「地域」の「支援者」の取り組みを把握する。 2-4-2.支援者が困ったこと、悩んだことを「相談」を受けたり「報告」をする。	「家庭」「地域」「支援者」「相談」「報告」
明確化	2	自他 の違 いを 明確 にする	5	限界性の把握	2-5-1.「家庭」の「経済的課題」への「支援」に「課題を抱える」。 2-5-2.「学校」「地域」の「支援機関」に「家庭」の「問題点」などを「伝え」、必要があれば「専門機関」に「繋げる」。	「家庭」「経済的課題」「支援」「課題を抱える」「学校」「地域」「支援機関」「問題点」「伝え」「必要があれば」「専門機関」「繋げる」
			6	専門性の類似点・相違点を 探る	3-6-1.「学校」が取り組んでいる「家庭支援」と「行政」が取り組んでいる「家庭支援」について「情報共有」する。	「学校」「家庭支援」「行政」「情報共有」
探求	3	み論 立理 てを 組	7	限界性の類似点・相違点を 探る	3-7-1.「支援者」が「困ったこと」「悩んだこと」を「相談」を受けたり「報告」をする。	「支援者」「困ったこと」「悩んだこと」「相談」「受けたり」「報告」
			8	専門性と限界性を踏まえた 対話	4-8-1.家族が抱える生活課題に対して、「支援者間」で出来ること、出来ないことを「一緒に」話し合う。 4-8-2.支援者が抱える支援上の悩みを聞きながら、家庭が孤立しないように「地域」の支援者と連携する。	「支援者間」「一緒に」「地域」
統合	4	考通 えつ た筋 す表 す現	9	新たなアイデアの創造	5-9-1.「学校」「幼稚園」「保育園」「学童」「子育て支援課」「医療機関」「生活保護課」「警察」などと「繰り返し」「家庭の状況」を踏まえて「話し合う」。 5-9-2.「学校以外」の「居場所づくり」。	「学校以外」「居場所づくり」「学校」「幼稚園」「保育園」「学童」「子育て支援課」「医療機関」「生活保護課」「警察」「繰り返し」「家庭の状況」「話し合う」
			10	アイデアの具体化	6-10-1.家族と直接的に関わることができないため、家族と繋がりのある「地域」の支援者などを通して、「家族との繋がりの」「結び目」をつくる。	「地域」「家庭との繋がりの」「結び目」
具体化	5	批 聴判 的に え新 出を しす 生い み考	11	共に取り組む	7-11-1.「子ども」に「直接的」に「会えない場合」は、「SSW」や「主任児童委員」などと「一緒に」「訪問」し、「声」を「拾い上げる」。 7-11-2.「学校」だけでは「対応」が「難しい」ので「SSW」に「繋がる」。	「子ども」「直接的」「会えない場合」「SSW」「主任児童委員」「一緒に」「訪問」「声」「拾い上げる」「学校」「対応」「難しい」「繋がる」

Ⅳ. 考察 要対協における家族支援の創造的な対話活動の展開

(1) 家族支援の限界性からみえてきた要対協の課題

要対協支援者が捉える家族支援の限界性から、要対協の課題がみえてきた。

1 対話を創る場の重要性

ハイリスク家族を地域で支援する上で、要対協が地域の中核を担っている。地域の支援者による生活課題を抱える子どもや家族の情報集約の場となり、早期発見・支援に繋がる。家族支援を展開する上で、各専門領域を担う支援者の役割分担や協働を展開することができる。そして、地域の支援者が一堂に会して、子どもや家族が抱える生活課題の状況等をもとに、各専門的

な立場による見立てや家族の変化等を共有することによって、家族に関わる担当者の意識の変化や負担の軽減に繋がっていた。したがって、支援者の対話活動を通して、地域の支援者との連携・協働によって家庭の実情に合った子ども家庭支援やサービス等を創造し実施する上で、対話を創る場としての要対協の機能及び役割の重要性が改めて捉えられた。

2 多角的な情報の統合の必要性

ハイリスク家族の生活状況の整理や適切な支援の取り組みを展開するために要対協支援者が捉えた情報を多角的に捉え統合する必要がある。家族が抱える多様かつ複合的な生活課題の状況について、支援者が捉えた情報を基に整理し、リスクの程度を推し量り、介入のポイントを探ること等が課題として明らかになった。要対協支援者1人ひとりによる日常的なコミュニケーションが求められる。要対協の支援者会議等の集まる機会以外、家族の情報を統合する機会が少ない状況がみえてきた。家族と関わる支援者自身が日頃から地域の支援者との顔の見える実践を展開することが求められると考える。そして、家族支援には情報の正確さが求められる。要対協は普段は所属や専門性の異なる地域の支援者で構成されていることから、家族支援に係る情報を共有することが課題となる。各々が捉えた情報を伝聞形式で共有したものや個人的な偏見で捉えたものではなく、専門的な視点から捉えた情報や客観的な事実の積み重ねが家族支援において最も重要となる。家族の本来持っている力を促すのに、この適切な情報は役立つと考える。したがって、子ども・家族に係る情報の出所の正確さ、各専門機関の専門性、見立て等の適切さが求められる。

3 当事者との接点の探索

要対協で取り上げられる家族は、地域から孤立しているケースが多く、家族が地域との繋がりを拒絶していたり、家族との信頼関係が築けていない等の要因を背景に要対協支援者と当事者との接点を持てていない状況も捉

えられた。ハイリスク家族に対する支援には、前提として「われわれが子どもたちの親たちを援助するまでは子どもたちを援助することができない」(Kaplan等 2001:11) とあるように、不登校状態にある子どもと関わる上で、子どもを支える家族と地域の支援者との関係を築き上げる必要がある。そのため必要に応じて、家族と関係を築いた支援者を介した当事者との接点をもったり、家族が安心して出向ける場等の環境作りに関する検討も初期介入の方法として求められる。

4 家族支援に対する関わり方（援助技術）

要対協を構成する支援者は、地域の支援者で構成されている。学校教職員やケースワーカー等の有資格者を所持し、その専門性を発揮している支援者もいれば、主任児童委員や民生委員等の地域のインフォーマル資源として、子どもや家族と寄り添う支援者もいる。そのためハイリスク家族に対する援助技術として、その専門性や力量に差が生じてしまい、ひいては同じ家族に関わっていても支援者によっては関わり方の差や意識の差が生じてしまう傾向にあることが課題として捉えられた。したがって、支援者の対話活動を通して、家族に対する関わり方として、先ず家族支援における要対協組織としての意識の統一、家庭や地域へのアプローチの方法について検討することが求められる。また支援者1人ひとりの援助力を伸ばすために外部講師を招いて研修会や事例報告会等を図ることにより、援助力養成を図ることが求められる。

5 地域の社会資源

ハイリスク家族を地域で支える上で、要対協支援者すべてが地域の社会資源を十分に理解できていない状況がある。そのため支援者の対話活動を通して、地域の社会資源としてフォーマル、インフォーマルな社会資源の専門性やその限界の把握、地域の支援者との繋がり希薄さ、地域の社会資源の把握等の課題が明らかになった。

(2) 創造的な対話活動の構成過程

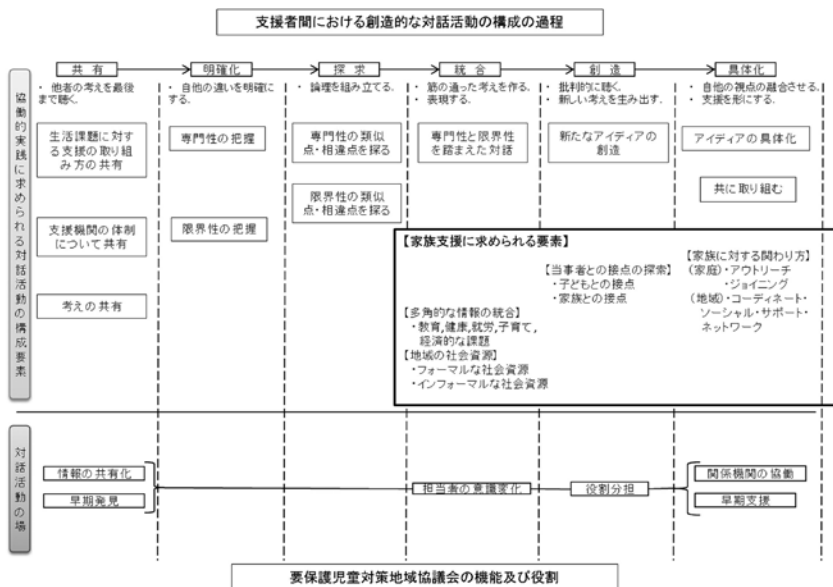


図1. 「支援者間における創造的な対話活動の構成の過程」

結果で捉えた【ステージ】等を基に「支援者間における創造的な対話活動の構成の過程」を図としてまとめた。【共有】の段階では、《要対協の機能及び役割》の〈情報の共有化〉〈早期発見〉が要対協支援者の対話活動において求められる。ここでは、対話活動の構成として〈生活課題に対する支援の取り組み方の共有〉〈支援機関の体制について共有〉〈考えの共有〉が成される。この対話活動の過程では、どのような支援機関・職種が家族に対して関わっているのか、支援者の家族支援によってどのように家族が変化したのか、あるいは変化していないのか、支援者の所属機関の体制の確認等の支援者の考えを共有することで、要対協で取り上げられる家族の情報の共有化を図り、早期発見に繋げている。次に【明確化】の段階では、支援者1人ひとりとの対話を通して、それぞれの〈専門性の把握〉〈限界性の把握〉を図る。協働的实践に結びつけるための支援者間の専門性と限界性の差について明

確にしている。次に【探求】の段階では、〈専門性の類似点・相違点を探る〉〈限界性の類似点・相違点を探る〉中で、家族支援における支援者1人ひとりの実践内容の確認、協働できる部分を調整する段階である。【統合】の段階では、《要対協の機能及び役割》の〈担当者の意識変化〉が求められる。〈専門性と限界性を踏まえた対話〉を通して、支援者による筋の通った考えを作り、他の支援者に対して表現することによって、支援に携わる担当者の意識の変化が促される。【創造】の段階では、《要対協の機能及び役割》の〈役割分担〉が求められる。〈新たなアイディアの創造〉として、支援者間の対話を批判的に聴きながらも新しい考えや提案等を生み出すことによって、支援者間の役割分担が行われる。【具体化】の段階では、《要対協の機能及び役割》の〈関係機関の協働〉〈早期支援〉が求められる。〈アイディアの具体化〉〈共に取り組む〉を通して、自他の視点を融合させながら支援を形にすることによって、要対協支援者間の協働や早期支援に繋がっているのではないだろうか。

おわりに

本研究を通して、家族支援の限界性からみえてきた要対協の課題として、「対話を創る場」「多角的な情報の統合」「当事者との接点の探索」「家族支援に対する関わり方（援助技術）」「地域の社会資源」が捉えられた。支援者は地域の支援者で構成されており、子ども・家族に係る情報の出所の正確さ、各専門機関の専門性、見立て等の適切さ、支援者1人ひとりの家族支援における援助力養成等が求められる。一方で「創造的な対話活動の展開」として、【共有】【明確化】【探求】【統合】【創造】【具体化】の対話活動の構成過程があることを捉えた。各対話活動の段階において、《要対協の機能及び役割》として、〈情報の共有化〉〈早期発見〉〈担当者の意識変化〉〈役割分担〉〈関係機関の協働〉〈早期支援〉の場面において、創造的な対話活動の展開における各構成過程を意識した語りを支援者1人ひとりが意識をもつことがよりよい家族支援における協働的实践、アイディアの創造に繋がると考えられる。

要対協の対話活動は、家族支援に関する客観的な情報を取り扱うために、

「公正・中立的な場」であり、「対話を創る場」となる。要対協の場において、「創造的な対話活動の過程」は地域の支援者による知識・技術の積み重ねによって、家庭の実情に合った家族支援やサービス等を創造し実施できることが考えられる。特に創造的な対話活動の構成過程では、【創造】の過程が《要対協の機能及び役割》の〈役割分担〉する上で重要になると考えられる。つまり、要対協に集う支援者がもつ家族支援における専門性と限界性といった各々の視点・考え方・価値観を伝え合い、協議する中で互いに把握すること、限界性を相補的に補うことによって、専門性を超えた創造的な家族支援のアイデアが生み出されるのではないだろうか。したがって、創造的な家族支援の探究及び発見には、支援者間による創造的な対話活動が重要と考える。

本研究では、A地域の要対協の協力を得ることで調査実施した。本調査は1つの団体の取り組みから捉えた結果であり、要対協支援者も教育関係者、福祉関係者、行政関係者で構成されるものである。例えば、医療関係者が要対協の支援者としてメンバーに組み込まれることによって、医学的な視点により子どもや家族の状態像をより客観的に捉え、家族支援の介入のタイミングや状態像についてのアセスメントも進むと考えられる。一方で、ハイリスク家族と向き合う地域の支援者の対話活動を基に、支援者が捉える家族支援における限界性を捉え、要対協が抱える課題について本研究を通して提示することができた。そして、要対協の場を家族支援における「対話を創る場」として捉え、支援者の対話活動を通して「創造的な対話活動の展開」として、支援者同士が要対協の機能及び役割を意識した創造的な対話を展開することによって家族支援における新たな知識や援助技術の生成に繋がるだろう。この視点は要対協及び他職種が集うケースカンファレンスにおいて、異なる専門性をもつ支援者との協働及び連携における可能性に焦点を当てることができたと考える。今後、要対協支援者の専門性と限界性を踏まえた上でケース会議を展開する上での会議の工夫の仕方や支援者間の課題検討の在り方等について要対協の会議にて生じる対話活動を基に更に深めていきたい。

注

- 1 文部科学省（2010）によれば、「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるため年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」と不登校を定義している。しかしながら、病気や経済等のその他の事情により学校に行けない、もしくは、行きづらい状況にある子どもたちもいるため一概には言えない。そのため本研究では、子どもたちの状態や状況を「不登校状態」と表記している。
- 2 不登校や児童虐待等といった家庭状態の背景には多様な要因があり、親にかかる負担は、子育て、就労、経済的負担などの生活課題が多様かつ複合的に絡んでいる。この多様かつ複合的な生活課題を抱える家族を、Kaplan（2001:49）は「ハイリスク家族」として位置づけている。
- 3 水村等（2014:152）によれば、ケースカンファレンス（カンファレンス）は、本人・家族および地域の支援者が包括的ケアにおける相互の役割や行動、支援に係る情報等を確認し、共有する場であり、多職種協働の要となることを説明している。
- 4 調査において得られた語りのなかでも、当事者が抱える困り感、取り組み、当事者なりの工夫、物事が変化したきっかけ等といった取り組みに着目してデータを整理している。
- 5 理論的コード化とは、データに根差した理論（グラウンデッド・セオリー）を開発する目的で集められたデータの分析する手続きである。調査で得た語りの内容は、個人を特定しやすい、機密性の高いデータとなる。そのため理論的コード化の手続きを通して、語りという機密性の高いデータの抽象度を高めた。
- 6 オープン・コード化は、データや現象を概念の形で表現するためのコード化である。この目的のため、データははじめばらばらに分割される。データは意味の単位（単語あるいは短い単語のつながりなど）毎に分類し、それぞれにメモや「概念」（コード）をつける。

- 7 軸足コード化とは、複数のサブ・カテゴリーをひとつのカテゴリーに関係づけるプロセスである。そして、これは、いくつかのステップを含む帰納的および演繹的思考の複雑なプロセスである。軸足コード化でこれらの手順を行う際には、パラダイム・モデルとの関連で、カテゴリーを発見し、関係づけることにより焦点が絞られる。
- 8 選択的コード化では、更に抽象度の高いレベルで軸足コード化を繰り返す。この段階の目的は、中核カテゴリーを繰り返すことである。この中核カテゴリーの役割は、その周りに他の形成されたカテゴリーをまとめ、統合することである。

参考文献

- 梶原浩介（2016）「学校ソーシャルワークにおける子ども家庭支援の展望-子ども家庭支援の在り方と促進者としての援助技術-」日本学校ソーシャルワーク学会『学校ソーシャルワーク研究』第11号, 2016-11.
- 加藤曜子（2014）「児童虐待予防に向けた県と市町村の取り組み - ある自治体例からの一考察 - 」『流通科学大学論集-人間・社会・自然編-』26(2), 2014,1-11.
- 加藤曜子（2016）「市町村児童家庭相談と要保護児童対策地域協議会の運営」『流通科学大学論集』28(2), 2016, 29-41.
- 厚生労働省（2000）『子ども虐待対応の手引き』, 2000.
- 厚生労働省（2016）「児童虐待の定義と現状」厚生労働省ホームページ、http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuitebunyakodomo_kodomo_kosodate/v/about.html、2016-06閲覧.
- 厚生労働省（2019）「平成30年度児童相談所での児童虐待相談対応件数<速報値>」2019-08-01.
- 栗原寿典（2016）「学校における共感的な人間関係に基づく同僚性の構築-ダイアログを基盤として」『山形大学大学院教育実践研究科年報』(7),

2016-02-20, 134-135.

Lisa Kaplan, Judith L. Girard(1994). Strengthening High Risk Families:A Handbook for Practitioners.(=小松源助監訳, 奥田啓子, 鈴木孝子, 伊藤富士江共訳 (2001)『ソーシャルワーク実践における家族エンパワーメント-ハイリスク家族の保全を目指して-』中央法規, 2001.)

丸野俊一 (2014)「応答的な『話す』・『聴く』行為が紡ぎ出す『創発的な学び』を求めて」『全国大学国語教育学会発表要旨集』(126), 2014-05-17, 175-177.

水村純子・吉本照子・緒方泰子 (2014)「地域包括支援センターにおける包括的ケアに向けたケースカンファレンスの基準づくり」『保健医療科学』63(2), 2014, 152.

文部科学省 (2016a)『平成27年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(速報値)について』文部科学省初等中等教育局児童生徒課, 2016-10-27, 65.

文部科学省 (2016b)『不登校児童生徒への支援に関する最終報告——一人一人の多様な課題に対応した切れ目のない組織的な支援の推進』不登校に関する調査研究協力者会議, 2016-07-29, 3-4.

文部科学省 (2019)『平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について』文部科学省初等中等教育局児童生徒課, 2019-10-17, 7.

長沼葉月 (2015)『『ケースカンファレンスの方法』の体験型研修に関する一考察』『人文学報』(499), 2015-04, 18-25.

労働政策研究・研修機構 (2012)「子どものいる世帯の生活状況および保護者の就業に関する調査 (第1回子育て世帯全国調査)」『JILPT調査シリーズNo.95』2012-03-17, 13-21.

労働政策・研修機構 (2015)「子育て世帯のウェルビーイング - 母親と子どもを中心に」『JILPT資料シリーズ』(146), 2015-02, 54.

Uwe Flick(2001). Qualitative Forschung. (=小田博志、山本則子, 春

日常, 宮地尚子訳 (2009)『質的研究入門—＜人間の科学＞のための方法論』春秋社, 2009.)

**Family Support Based on Open Dialog among Supporters in Regional
Councils for Children in Need of Protection: Challenges Facing
Supporters and the Development of a Creative Open Dialog**

KAJIWARA Kousuke

Abstract

Interviews were conducted with 27 supporters of regional councils for children in need of protection. The main purposes of the study were to (1) organize issues in family support faced by the supporters and (2) clarify components of narratives constituting a creative open dialog among them. The results were organized by text mining and were analyzed using the Qualitative Content Analysis. Responses were obtained from 23 people (response rate: 85.2%) . Challenges facing supporters included “places to facilitate dialog” and “integration of diverse information.” The components of narratives that constitute a creative open dialog were [sharing], [clarification], [investigation], [integration], [creation], and [realization].

The results indicated that in the open dialog of the regional councils, the [creation] process is important for conducting <role-sharing> with regard to the <<functions and roles of regional councils>>. Accordingly, a creative open dialog among supporters is necessary for the investigation and discovery of family support.

Keywords: Regional councils for children in need of protection, supporters, family support, narratives, creative open dialog